

音楽の構成原理を中心とした創作分野の実践的研究

—自己調整力を身につけるプロセスの解明—

学 籍 番 号 249331

氏 名 仙波 和也

主指導教員 吉野 秀幸

副指導教員 猿谷 紀郎

1. 研究の背景

中学校音楽科学習指導要領(平成29年告示)の目標に「表現及び鑑賞の幅広い活動を通して、音楽的な見方・考え方を働かせ、生活や社会の中の音や音楽、音楽文化と豊かに関わる資質・能力を…育成する」とあるように、音楽科教育の本質は、音楽との単純接触的な体験にとどまるものではない。もし、ここで「音楽的な見方・考え方」という視点が欠けてしまえば、学習活動としての音楽は、日常生活経験の追体験にすぎないものへと形骸化してしまう。明治期においては、蓄音機の一般的普及を欠いたことから、音楽体験の機会が保障されておらず、たとえ単純接触的な音楽体験であったとしても、機会保障機能を担っている点に音楽科教育の特異性を見出すことができた。しかし、音楽へのアクセシビリティが改善した今日に至っては、音楽の仕組みを理解することのない単純接触的な音楽体験であれば、日常生活において容易に可能となっている。これに鑑みると、今日の音楽科教育には、単なる機会保障にとどまらない、深い音楽体験を創造することが不可欠であると考えられる。

2. 先行研究

創作分野における研究として、R. Tomas (1971) が提唱し実践した “*Manhattanville Music Curriculum Program*” (以下、「MMC P」という。) を挙げることができる¹⁾。本プログラムは1965年から1970年にかけて米国において実践された学習プログラムであり、学習者が表現したいイメージを音楽の構成要素に即して音楽表現と結び付ける活動を核とするものである。このような学習活動が重視されるに至った背景として、1957年のいわゆるスプートニク・ショックにより米国における科学技術教育の遅れが明らかになり、これを受け、各教科において科学性および系統性の向上が強く求められたことが挙げられる。その結果として、従来の経験主義的教育観が相対化されたのみならず、音楽科教育においても従前の演奏技能習得のみに重きを置く授業形態に対して批判が向けられるに至った。こうした状況下で、音色、リズム、旋律といった音楽の構成要素に焦点を当てる新たな指導法である概念学習が台頭し、MMC Pはその代表的事例の一つとして位置付けられる。従来の音楽科教育がすでに存在する楽曲を演奏することに主眼を置いていたのに対し、MMC Pでは、音楽それ自体を対象として、すべての音楽に共通する普遍的な音楽概念の習得を通じて汎用的な音楽的思考を育成することを主眼としている。

さらに、英国における創作的学習活動の事例としては、J. Painter および P. Aston (1970) による *Sound and Silence* が挙げられる。全36のプロジェクトから構成されるこのプログラムは、山本文茂らによる邦訳『音楽の語るもの』（1982年）²⁾ として紹介されたのち、1980年代に全国的に実践が拡大した。原書中における“Creative Music Making”の訳語として示された「創造的音楽学習」に関する内容は、1989年改訂の第6次学習指導要領において、小学校では「音楽づくり」、中学校および高等学校では「創作」として正式に位置づけられた。現行の第9次学習指導要領においても、音楽を形づくっている要素が示されており、音楽の構成原理を中心とする学習活動が期待されている。

3. 研究の目的

本研究の目的は、音楽の構成原理を中心とした創作活動を通して、生徒が試行錯誤しながら自己調整力を身につけるプロセスを解明し、創作活動における学習体験がどのように学習の深化と自己調整力の向上に寄与するかを明らかにすることである。本研究では、さらに、創作活動が生徒の音楽的理解や実践的態度の進展に与える影響を検討し、創作プロセスが生徒の学習活動全体に与える意義と役割について考察を行う。

4. 授業実践

発展課題実習Ⅱの一環として、2025年10月1日から11月28日まで、K市立K中学校の1年生2学級（計48名）を対象に「経過音や刺繍音を使ってカノンをつくろう（全4時間）」の授業実践を、各学級に対して週1回、50分授業を2回実施した。このうち、実践課題研究報告書では1学級（男子：15名、女子：9名）における実践内容と成果について焦点を当てて報告を行った。

5. 総合考察

ワードクラウド分析、共起ネットワーク分析、感情認識AI分析を用いて、生徒の創作プロセスにおける内省的経験や技術的挑戦、協働的学び、感情の動きについて多角的に検討を行ったところ、音楽の構成原理を中心とした創作活動は、単なる技術や知識の伝達を超え、自己調整力を身につけることに寄与する可能性が示唆された。生徒は、試行錯誤を通じた創作活動によって、音楽に対する理解を深め、自己調整力を引き出すことができる。また、音楽の創作過程において、生徒が自己調整力を発揮し、試行錯誤を楽しむことによって、音楽に対する深い理解と実践的態度を身につけることもできる。この過程では、成功体験だけでなく、失敗もまた自己調整を支える重要な要素であり、生徒が新しいアプローチを試み、それを磨き上げていくことこそが、学習活動の基礎となると結論づけた。

1) R.Tomas (1971) “*Manhattanville Music Curriculum Program. Final Report*” Manhattan College, p.110.

2) J.ペインター, P.アストン著, 山本文茂, 坪能由紀子, 橋都みどり共訳(1982)『音楽の語るもの』音楽之友社, pp.1-23 参照。